

経鼻内視鏡における前処置変更への取り組み ～より簡素な処置法の確立に向けて～

いづろ今村病院 看護師 ○梅田弥生 石田美香 山元優佳子 重吉早紀
新原佳那子 永吉麻子 小松知美 宮田美穂
医師 生駒今日子 小野陽平 徳元攻 大井秀久

はじめに

上部消化管内視鏡検査には経口と経鼻の2種類がある。経鼻での上部消化管内視鏡検査は、経口と比べ、苦痛の少ない検査方法であり、鎮静剤を使用しなくてよいというメリットがある。しかし、従来当院で行っている経鼻内視鏡は、その前処置が煩雑であり時間を要するというデメリットがあった。

今回、前処置の方法を変更し処置時間の短縮を図るとともに、被検者の不快感の有無、並びに検査時の偶発症の発生頻度に対する調査を行ったので報告する。

対象・期間

令和元年9月11日～令和元年12月25日

経鼻内視鏡検査を受けた外来・入院患者、人間ドック受診者 40例

方法

変更前はスティック2本法（以下スティック法）で行っていたが、変更後は川田らの方法（以下噴霧法）を採用した。

検査終了後、対象患者と検査医に対する選択・記述式アンケート調査、看護師へ選択・記述式アンケート調査を行った。

結果

処置が楽だったと回答したのは31例（77.5%）、苦痛だったと回答したのは9例（22.5%）だった。検査医のアンケートでは、鼻腔の広がり問題ありが5例（12.8%）、内視鏡挿入不可能例は4例（10.2%）だった。全対象、内視鏡挿入時に出血はなかった。看護師のアンケートは、8名中8名（100%）が以前と比べ、処置時間が短縮され前処置を変更して良かったと回答した。

考察

前処置に不快感を感じたと回答した患者の割合は22.5%であり、以前スティック法を導入する際に行ったアンケートで、同様の回答があった割合より4.3%増加した。常見らの研究によれば、噴霧法とスティック法では噴霧法の方がより麻酔時の鼻痛が少ないという結果が得られており、必ずしも噴霧法に対してスティック法が患者にとって苦痛の少ない前処置であるとは判断し難い。今回の調査はスティック法との比較検討調査ではなく、このデータは単純に鼻に対する処置の不快感を示している可能性があると考えられる。安全性の面では、全体の約一割で内視鏡挿入不可能な症例が見られた。これは鼻中隔弯曲症や鼻甲介の突出の有無で、解剖学的に経鼻内視鏡が挿入困難なケースも少なからずあると思われる。

看護師のアンケート結果では、処置時間の短縮、前処置を変更して良かったか、の双方でスタッフ全員から肯定的意見が得られた。

結語

経鼻内視鏡検査の前処置法を見直すことで、手順が簡素化し処置時間が短縮した。業務の効率化、スタッフの負担軽減に貢献することが出来た。